

# エネルギー産業の経済学的基礎

2001年1月10日

大阪ガス株式会社

エネルギー・文化研究所

豊田尚吾

# 本日の内容

2つの「伝えたいこと」

モチーフとキーワード

エネルギー基礎講座のナビゲート

理論が「事実」を造る

問題を科学的にとらえるための3つの方法

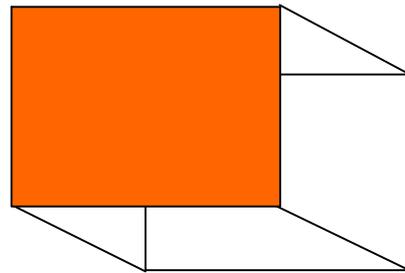
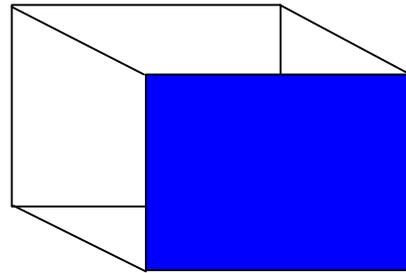
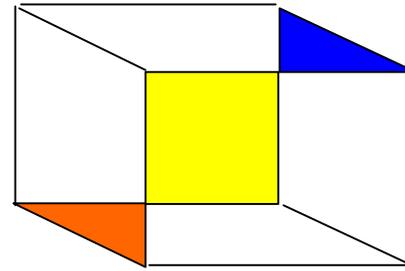
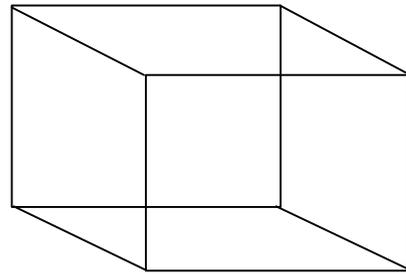
理論が事実を造る

マルチ・ディシプリンのすすめ

## 2つの「伝えたいこと」

- ・ 基礎講座に関する整理  
理論が「事実」を造る  
「問題意識」と「見方」の重要性
- ・ エネルギー問題を見る目  
問題解決のための3つの方法  
理論が「事実」を造る  
マルチ・ディシプリンのすすめ

# モチーフ



# インプリケーションとキーワード

- 問題意識の持ち方でものの見え方が変わる
- 一つの見方をした時には、ほかの見方をすることができない
- キーワード(問題意識 3つの方法論 マルチ・ディシプリン)

# エネルギー基礎講座のナビゲート(1)

問題意識:  $3E + E$

経済成長の持続

エネルギーの安定供給

地球環境保全

} 3E

効率性

E

# エネルギー基礎講座のナビゲート(2)

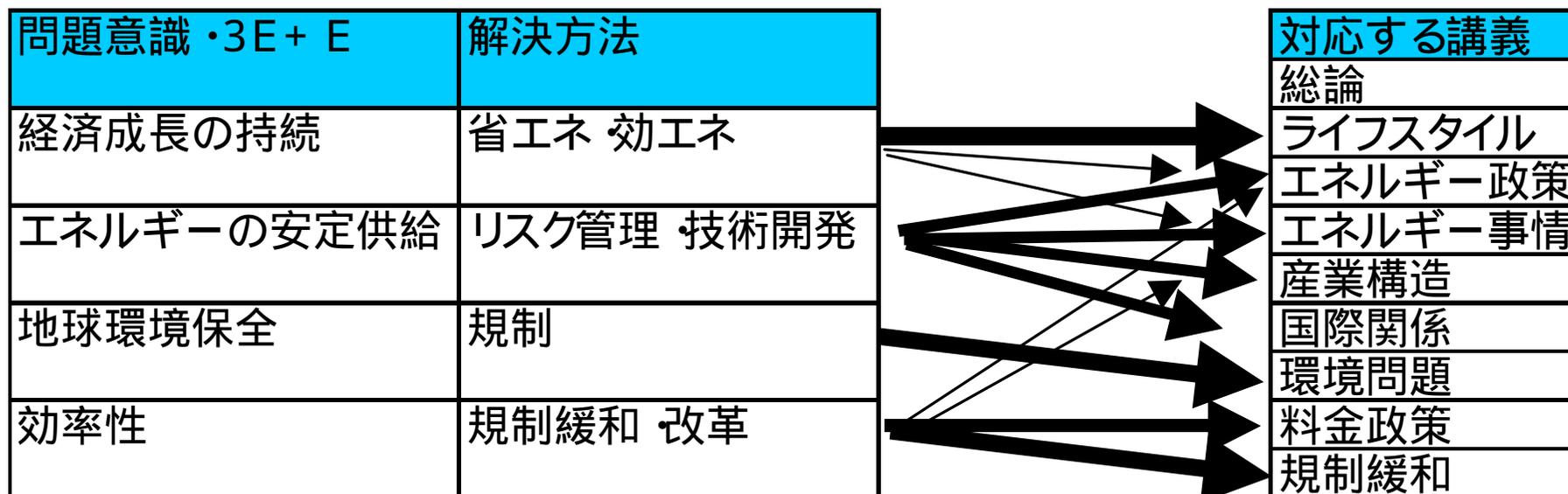
## 基礎講座が伝えようとしていること

問題意識・3E+E	経済学的理解・理論的枠組み	解決方法
経済成長の持続	経済(目的)と対応する手段・制約条件	省エネ・効エネ
エネルギーの安定供給	財の特性(枯渇・技術的可能性)	リスク管理・技術開発
地球環境保全	市場の失敗(外部不経済)	規制
効率性	市場・競争の活用、人為	規制緩和・改革

# エネルギー基礎講座のナビゲート(3)

講義	
総論	
ライフスタイル	よりよく使いましょう
エネルギー政策	供給確保 省エネ、セキュリティ(含む技術開発)
エネルギー事情	複雑な経緯(歴史性)、不確実性の高い将来(需給・価格)
産業構造	財としての特性 事業構造に反映
国際関係	安定確保への取組
環境問題	環境に配慮する必要性、様々な取組
料金政策	自由化の流れ
規制緩和	普通の企業へ・自己責任

# エネルギー基礎講座のナビゲート(4)



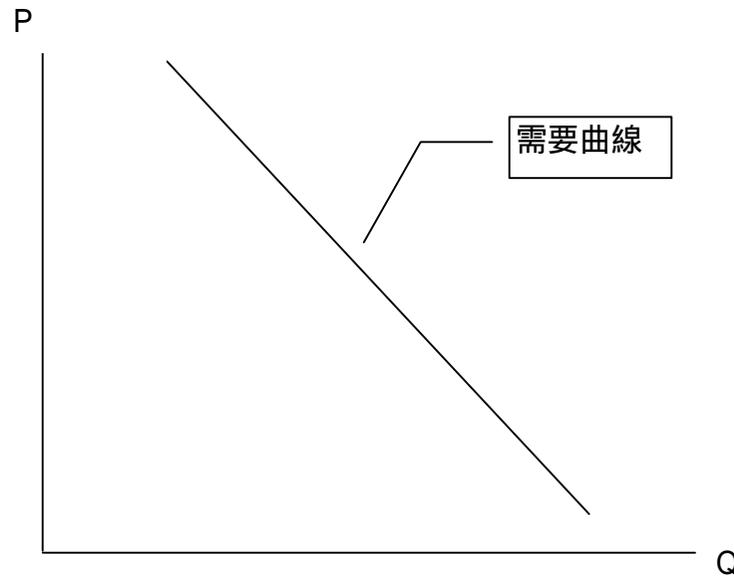
# 理論が「事実」を造る (1)

- なぜ電力・ガス事業は地域独占が許されているのですか？
- なぜ電力・ガス料金は認可料金なのか？

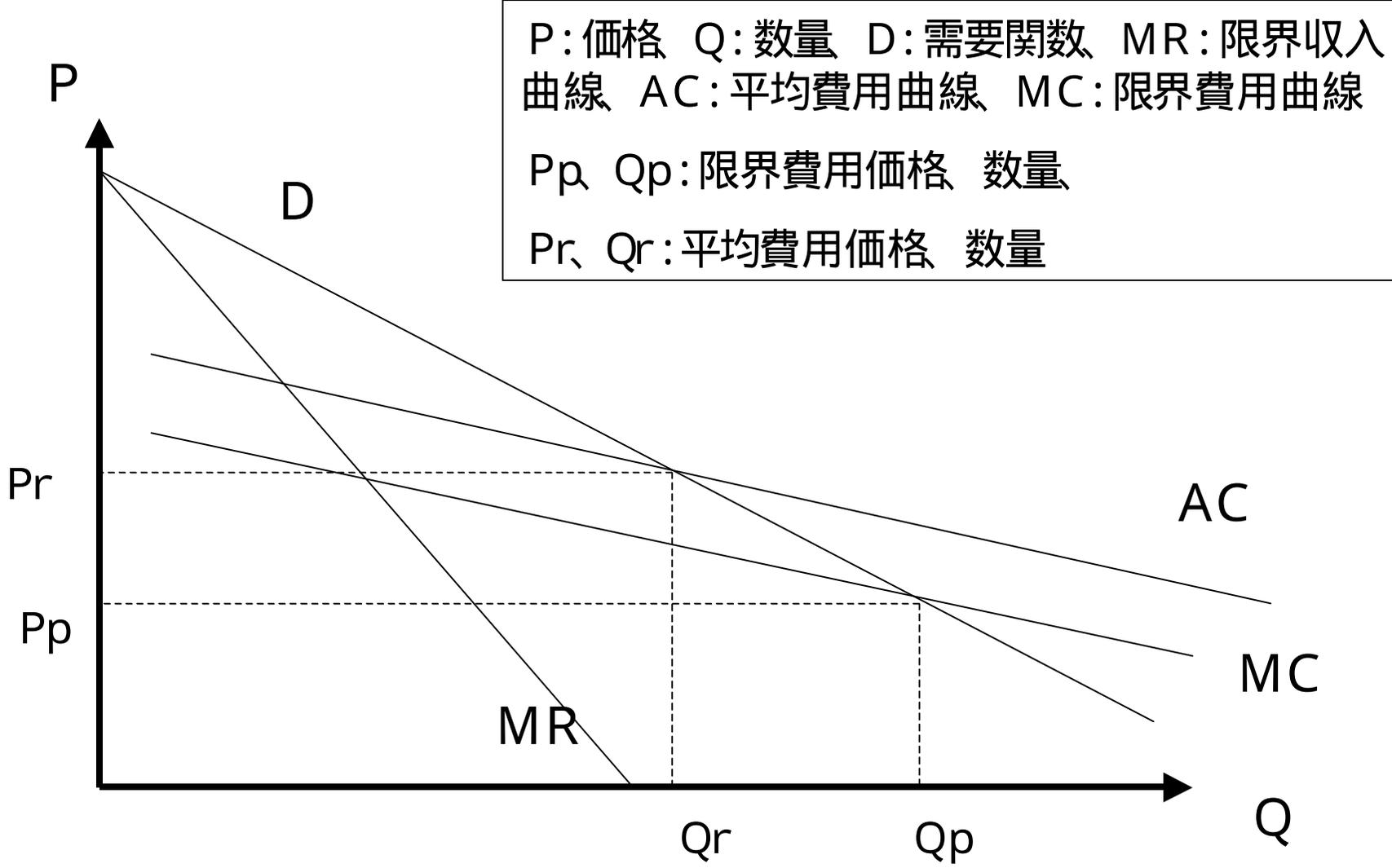
産業組織論(新古典派・伝統的なミクロ経済学)

# 理論が「事実」を造る (1')

需要曲線はなぜ右下がり？



# 理論が「事実」を造る (2)



## 理論が「事実」を造る (3)

- はじめから産業組織論的理論のもとで認知されていたの？ 制度経済学的理解
- 制度学派は、集団的行為の形態に注目する。先験的な演繹ではなく、特定の社会の現存の経済学のおよび文化的形態を尊重し、歴史学、心理学、哲学、政治学、社会学及び人類学など総合的な観点から、経済を形成する人類的諸勢力、即ち制度について考察する。(クレメンズ)

# 問題を科学的にとらえるための 3つの方法(1)

**観察帰納法**: 観察による認識を、帰納法によって検証可能な存在にする

**仮説演繹法**: 仮説法則を立て、テスト命題を演繹的に導き出し、経験とつきあわせ、反証されるまで暫定的に受け入れる

**意味解釈法**: 特殊で個別な事象の意味を認識し、解釈法によって了解可能な存在にする

「社会学の基礎」有斐閣を参考に作成

## 3つの方法(2)

「認識的構え」と「存在様式」を接続するのが科学としての「理性様式」

認識	接続	存在	(例)株価
観察	帰納	検証	罫線分析
仮説	演繹	反証	ファンダメンタルズ
意味	解釈	了解	市場の思惑

今田高俊「自己組織性」創文社をもとに作成

# 3つの方法(3)

## 殺人事件のアナロジー

観察帰納	物証	現場の観察 帰納的に犯罪を裏付ける・検証する
仮説演繹	アリバイ崩し	殺人の仮説 演繹 (現場 & 容疑者) 反証できなければ仮説を正しいとする
意味解釈	動機	状況の意味 解釈 存在し得ること(動機)の了解

今田高俊「自己組織性」創文社をもとに作成

## 3つの方法(4)

主流の経済学においては仮説演繹法が絶対的権威。しかし...

- エネルギー問題に対するアプローチ  
資源: 安全保障・政治的影響  
産業: 特異性  
消費: 必需性 外部性  
規制緩和: 歴史依存性

多方面からの分析研究が不可欠

# 理論が「事実」を造る (1)

## 村上氏の問題提起

### 酸素とフロギストン

現在の私たちが絶対的に確かだと思いこんでいる理論においても、後代の人々が見たら、**屁理屈**としか思えないような理解に立っている、という可能性から免れがたい

## 理論が「事実」を造る (2)

- データの中立性への懐疑  
「現在私たちが共有している理論に対して致命的な反証となる事実を既に数多く手に入れていながら、それに気がついていないのかもしれない」

ではどうしたらよいのか？

# マルチ・ディシプリンのすすめ(1)

- ディシプリンって何だろう？  
＜ 学科 (subject), 学問分野 (branch of learning) ＞ 専門知識
- いかにかに問題意識を持つか、 3つの方法をい  
かに現実のものにするか ディシプリンが  
必要

## マルチ・ディシプリンのすすめ(2)

- 一つの見方にとらわれないために  
「気づき」を促す多方面からの考察
- 両刃の剣: すべて中途半端な見方になる  
危険性も
- 最も適した選択をするために、問題の大き  
さと自分の能力のバランスを見極める訓練  
が必要

# 結論1

白箱しか提供していない？

青い箱の紹介 「問題意識」と「見方」.

(赤ではなく)青い箱であることの確認 理論的背景の存在。

理論が事実を造る 青の理論を基に現実を見ることで青い箱の存在を実感する。  
同様に赤の理論を基に...

## 結論2

方法論の確認 青の理論を基に(認識の構え)、立体感の付与(存在への接続)、青い箱の存在を実感(検証 反証 了解)

理論が事実を造る データ中立への疑問 青い箱の存在を実感しているときには赤い箱は目に入らない。

必要なこと、専門性の取得( をより良く行うため) + 専門性の多様化( の呪縛から逃れるため。ただし注意は必要)